

雪むろを利用したウルの抑制栽培

齋藤 克哉・岡部 和広・栗田 公司*

(山形県農業研究研修センター中山間地農業研究部・*酒田農業改良普及センター)

Late Raising of *Hosta undulata* by Snow Cooled Storehouse

Katsuya SAITO, Kazuhiro OKABE and Kouji KURITA*

(Department of Hilly and Mountainous Areas Agricultural Studies, Yamagata Agricultural Research and Training Center・*Sakata Agricultural Extension Service Center)

1 はじめに

近年、当県では健康志向等により消費が拡大し、価格が安定したことや米価の低迷等によって、山菜を経営の一部門として導入する農家が増加している。

中でもウルイは、栽培面積が最も増大している品目である。ウルイの作型は1月から3月収穫の促成栽培、4月から5月の露地栽培が主体である。そこで出荷時期の拡大を目的に、雪むろを利用した抑制栽培について検討した。

2 試験方法

(1) 試験場所 山形県新庄市

山形県農業研究研修センター 中山間地農業研究部

(2) 供試系統 東根系

(3) 供試条件

雪むろ入庫 前年10月に掘り上げた株を野積みこもかけで保管し、3月3日に入庫

貯蔵方法 普通雪むろ、低温雪むろはポリエチレンフィルムで被覆

U字溝型雪むろは被覆なし

伏せ込み方法 屋外の軒下(北側)に伏せ込み床を設置
無加温、もみからで軟化

(4) 伏せ込み時期

6月11日 7月15日 9月10日

(5) 区の構成

① 内部貯雪型普通雪むろ (想定温度 2.0℃)

② 内部貯雪型低温雪むろ (想定温度 -2.0℃)

③ U字溝型雪むろ (想定温度 0.5℃)

(6) 供試規模

1区 5株

3 試験結果及び考察

貯蔵中の株重は、普通雪むろ、低温雪むろの区が次第に減少していく傾向にあったが、U字溝雪むろは7月以降増大した。これは、雪むろの構造が関係していると思われ、普通雪むろ、低温雪むろはやや乾燥し、U字溝雪むろは水滴が発生し、根株が常時濡れた状態となり、水分吸収によって増大したものと考えられた(図1)。

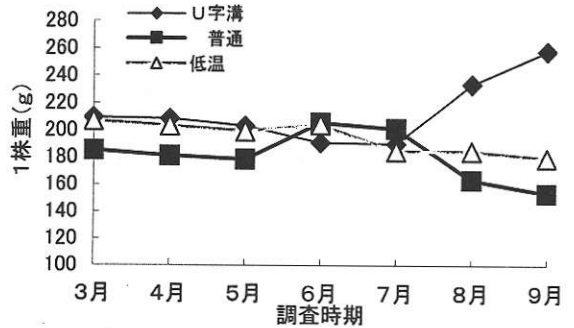


図1 雪むろ別1株重の推移

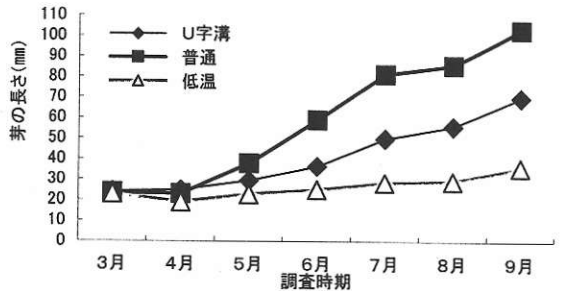


図2 雪むろ別芽の長さの推移

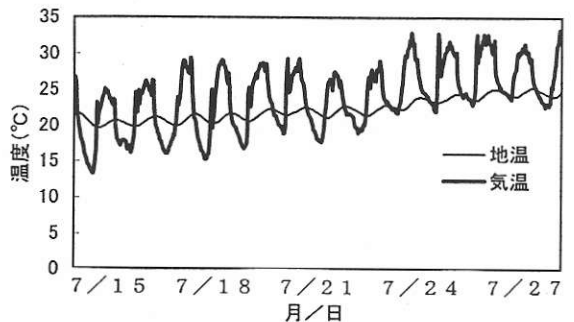


図3 伏せ込み床の気温及び地温の推移

芽は5月ころから各区とも伸び始め、貯蔵温度が高い区ほど伸びが大きかった。9月の芽の長さは、貯蔵温度の最

も高い普通雪むろは10程度、最も低い低温雪むろは4弱であった(図2)。また、芽の伸長の大きかった普通雪むろ区では、貯蔵中の株の重なりによって芽の破損が見られた。

伏せ込みから収穫までの所要日数は、6月伏せ込みが15日から17日、7月伏せ込みが10日から12日、9月伏せ込みが9日から11日で、促成栽培に比較し短期間で収穫となった(表1)。

収穫総収量は、一部の区を除いて促成栽培より高かった。これは、規格外品等のくず発生が少なかったためである。また、普通雪むろに貯蔵したウルイの芽の損傷が収穫物へ及ばず影響は認められなかった。M級以上の比率は、促成

栽培と比較してほぼ同等であった。(表1)

抑制栽培品の1本重は、促成栽培品に比較しやや小さい区もあったが、商品として十分であると判断された。軟白長は、ほぼ15以上であり問題がなかった。

4 ま と め

雪むろを利用したウルイの抑制栽培(6月から9月伏せ込み)は、品質も良好であり、有望である。しかし、雪むろの種類により芽の伸びが異なり、芽が伸びすぎると伏せ込み難く、また芽の損傷を招きやすいので、伏せ込み時期や伏せ込み時の取り扱いに注意する必要がある。